

第4回「こころにジ〜ンとくる！

いのちのエンジニアのはなし」受賞作品

最優秀賞 「臨床工学技士」

一般部門 上之段美保様

私の主人は、27歳で血液透析導入、35歳で在宅血液透析に移行、42歳の時に死体腎移植を行った。今、移植後8年を迎えトリアスロンに参加するほど元気な生活を送っている。これも一重にいつも身近で支えてくれた先生を始め、私たちの治療を指導して下さった臨床工学技士のおかげである。私達の治療の根幹と言ってもいいだろう。

血液透析導入8年後、子供達と一緒に時間を取りたいと、在宅血液透析に踏み切った。在宅血液透析は当時サテライト施設では極めて難しく、在宅血液透析を実施している病院へ紹介となった。

この病院で教育指導を受けることになり、一人の臨床工学技士に出会った。医療従事者でない素人に教育するのは、時間も労力も費やすが、なんと主人は、この臨床工学技士の指導の下、穿刺から始まり、返血、抜針方法、トラブルの対処など2週間でマスターした。

なぜこんなに習得が早かったかと言うと、主人が不安にならなかったことにつきる。血液透析のすべては穿刺で決まると主人は常に言っていた。穿刺も最初は失敗ばかりしていたが、臨床工学技士が、『失敗したら翌日すればいい。在宅血液透析のメリットを最大限に活かして。だから、失敗を恐れず、続けて頑張る。』といつも励ましてくれた。

介助者である私に対しても、『介助者の援助は必要不可欠だが、あくまでも在宅血液透析は患者の自己管理、問題解決のためにも患者自身が行うのが一番、介助者は見守りで。』と言ってくれた。心がジーンとするほど嬉しかった。

在宅血液透析が順調の中、突然、死体腎移植の話が舞い込んできた。腎移植後、Cr値落ち着かなかつたある日、臨床工学技士が病棟に臨時透析にやってきた。主人のシャントに穿刺して一言言った。

『腎臓もお互い探り合っているな。大丈夫言ってあげな。安心するよ。』と。

主人は心の中で毎日言った。

『大丈夫ですよ。』と。

3週間後、Cr値は下がり出した。祈りが届いた瞬間だった。

第4回「こころにジ〜ンとくる！

いのちのエンジニアのはなし」受賞作品

優秀賞 「目標としている臨床工学技士像」

技士部門 樽井克典様

臨床工学技士とは、医師の指示の下に、生命維持管理装置の操作及び保守点検を行う事を業とする医療機器の専門家である。また、臨床工学技士は他職種と連携し、常に患者の状態を把握し、チーム医療の一員として携わっていかなければならない。

以前、私は内科医師より慢性心不全で入院中の高齢の女性患者に対し、陽圧呼吸療法を指導するよう指示を受けた。患者は全盲の夫と二人暮らしであり、「最後まで夫の世話をしたい」と話され、夫と自宅で生活することを望んでいたが、何度も入退院を繰り返している状態であった。

当初、私は高齢であることから、自宅で治療を継続してもらうのは困難であると考えていた。しかし、患者は呼吸困難と下腿浮腫があり辛い表情をされていたが、「家で夫と暮らしたいので覚えます」と話され、治療に対して意欲的であった。指導は、何度も患者に練習してもらい、患者に自信を持ってもらえるように言葉を掛けた。医師や看護師と協力しながら、一回で多くの事を指導せず、少しずつ達成できる喜びを感じてもらえるよう関わっていった。退院時に患者から、「あなたが教えてくれたから頑張ることができました」という言葉を掛けられた。

医療従事者は患者の心理面に気を配り、常に患者のために全力を尽くさなければならない。たとえ患者の病気が治っても、患者が生きる意欲を失ってしまえば意味が無いと考える。私は今回の経験から、臨床工学技士として患者の「どのように生きたいのか」というクオリティ・オブ・ライフを維持する重要性を学んだ。患者は永眠されたが、この経験があったからこそ、私は現在も臨床工学技士という仕事を続けることができている。今後もこの経験を糧として、患者の気持ちを大切にできる臨床工学技士を目指していきたい。

第4回「こころにジ〜ンとくる！

いのちのエンジニアのはなし」受賞作品

優秀賞 「私と臨床工学技士との出会い」

学生部門 永井涼太様

私が臨床工学技士という存在に初めてであったのは高校1年生の時でした。当時私は文系に進むか、理系に進むか迷っていました。そして将来自分がどのような職業に就いて、どのような人間になろうかと考えていました。いろいろと考えているうちに人の役に立てるような仕事に就きたいと思うようになり、医療という存在が一番人の役に立てるのではないかと考えました。さまざまな医療職が存在する中で私は臨床工学技士という仕事を見つけました。

当時の私は医療といえば患者さんのためだけの仕事であると考えていました。しかし、臨床工学技士は人工透析業務など患者さんを助ける仕事のほかに、心臓手術中に人工心臓を用いて医師をサポートすることや、医療機器のメンテナンスを行うことですべての医療従事者に対してサポートすることができる職業であると思いました。また、臨床工学技士という仕事は他の医療職と比較してまだまだ歴史が浅く、新しい分野であると考えられていたため、今以上に活躍することができる仕事なのではないかと考えました。

これらのことを調べていくうちに私は、臨床工学技士という仕事は患者さんの役に立てるだけではなく、医師などの他の医療従事者に対しても役に立てるという非常に素晴らしい仕事であると思い、感動しました。また新しい分野であるため、まだまだ発展していけると思いとてもワクワクしました。そして私もさまざまな人の役に立つことができる臨床工学技士になりたいと思うようになりました。

現在は、臨床工学技士の国家資格を取得するために勉強しています。そして国家試験に合格し将来は、患者さんはもちろん医療従事者などのすべての人の役に立てるような臨床工学技士になりたいと思っています。